

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653140

研究課題名(和文) 多言語DAISYテキストに基づく「外国人児童学習支援」に向けたアクションリサーチ

研究課題名(英文) Action Research to build a Transnational Volunteer Support Network for Foreign Students' Education with DAISY Multi-lingual Digital Book

研究代表者

小澤 亘(OZAWA, Wataru)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：30268148

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)： デジタル図書規格DAISYに依拠し、外国人児童に対する国境を越えたボランティア学習支援ネットワークの構築を試みた。詳しくは、ウェブサイトrits-daisy.comを参照されたい。アクションリサーチを通じて、多言語DAISY図書の外国人児童言語学習(日本語・母語)における有効性を確認した。この支援ネットワークは、多くの潜在ボランティアを顕在化させるものであり、外国人児童教育に関する学校支援の新たな手法を提起することができた。

しかしながら、プロジェクト推進に当たっては、多くの社会的バリアーに直面した。本プロジェクト研究は、こうしたバリアーを乗り越えていく社会学的な実践研究でもあった。

研究成果の概要(英文)： We tried to build a transnational volunteer support network for foreign students by using the digital book technology called DAISY (please refer to our website: rits-daisy.com). Through our action research, we could ascertain that the multi-lingual DAISY textbook is efficacious as a tool for linguistic education toward foreign students. Even persons who do not have professional linguistic education skills can participate in our project. DAISY system makes it easier to link volunteers, professional staff, and school staff.

However, our project is facing difficulties and certain barriers. DAISY is usually thought of as a tool for disabled people. The government as well as the school board and school teachers cannot imagine that it can also be useful to foreign students. We examine our action research as one of the challenges to overcome this kind of difficulties.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：外国人児童学習支援 多言語DAISY教材 日本語学習 母語学習 アクション・リサーチ アイデンティティ・テキスト 帰国児童支援

1. 研究開始当初の背景

2008年リーマンショックを経て、日本における外国人労働者の生活は一変した。いわゆる「派遣切り」により、職を失う者が続出し、その子どもの多くが学校に行けなくなったり、また、母語もおぼつかないまま、帰国を余儀なったりと大きな問題が生じた。

1990年以降、ニューカマー児童の教育問題については、社会学研究者、日本語教育研究者によって、一定、調査研究が蓄積されてきた。

しかしながら、ニューカマー外国人が直面する、こうした困難な問題の解決に向けた有効な具体的策については、提起されてきたとは言い難い。多くは、人的配置の不十分性を指摘に留まるものであった。言語的な教育支援には、専門的なスキルが必要であり、また、日本語と外国人児童の母語の両方に堪能な人材育成には、時間と費用がかかるために、こうした提起は実効性を伴わないという弱点があった。

こうしたなかで、申請者は、テキストのユニバーサルデザインと言われる DAISY に注目し、滋賀県湖南市をフィールドとして、多言語 DAISY 教材（パソコン等の機器にて、文字・画像・音声をシンクロして再生可能な多言語デジタル教材）の開発という先進的な試みを行ってきた。

2. 研究の目的

就労目的で来日したニューカマーの子どもたちが直面する教育問題は深刻である。

そこで、本研究では、(1) 社会学的なアクション・リサーチの手法によって、学校関係者や支援者と連携し、外国人児童を取り巻く問題を明らかにするとともに多言語 DAISY テキストの開発を進め、外国にルーツを持つ多様な児童に対する新たな学習支援体制を構想・具体化していくことを目的とした。また、同時に、(2) リーマンショック後、日本語も母語も不自由なまま帰国せざるをえなかった児童の支援についても、とくに日系ブラジル人児童に注目し、ブラジル国内の支援組織と協同して、その実態把握に努めるとともに、多言語 DAISY 教材による学習支援体制を構想・具体化していくことを目指した。

すなわち、本研究の狙いは、テキストのユニバーサルデザイン（＝障がいの有無にかかわらず、だれにとっても便利なデザイン思想）として位置づけられる DAISY デジタル図書規格の応用を目指し、多言語 DAISY テキスト

をツールとして、外国にルーツを持つ児童のトランスナショナルな学習支援ネットワークを構築することにある。

時間と空間を越えるデジタルツールを支援ネットワークの結節点とすることによって、いままでボランティアとして関わられなかった潜在的なボランティア（たとえば、大学生や地域ボランティア）も、日本語や母語の教育を含む学習支援ネットワーク構築に取り込める点に、この新たな学校支援モデルの有意義性と斬新性がある。

実際、学校関係者やその支援者と一緒に協働して、外国人児童支援活動を展開しアクション・リサーチを行うことによって、こうした支援モデルの構築に際して直面する社会的バリアーを把握し、その乗り越えの道筋を明らかにしていくことも本研究の重要な課題であった。

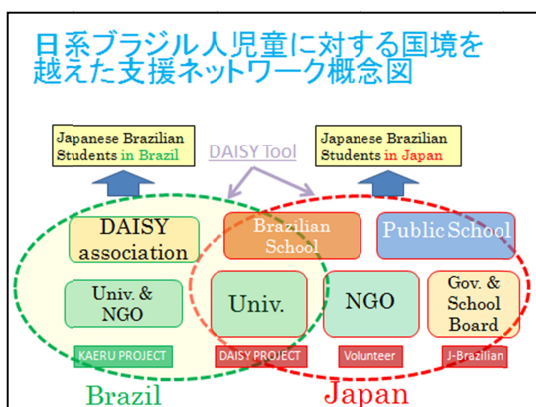
3. 研究の方法

本研究では、(1) まず、日系ブラジル人・ペルー人が集住する滋賀県湖南市に注目し、湖南市教育委員会の支援のもと、初級日本語教室や公立小学校をフィールドとして、外国籍児童が直面する問題を参与観察調査の方法によって把握する。(2) 初級日本語教室の学習効果を高めるため、多言語 DAISY 教材化（ポルトガル語、スペイン語、英語、中国語、タカログ語と日本語の2言語）のあり方を検討した後、共同制作する。(3) 初級日本語学校や公立小学校の日本語教室（ワールドルーム）に、ノートパソコン、タッチパネル型パソコン、iPad を提供・設置し、これらの多言語 DAISY 教材を活用し、その有効性を検証する。(4) さらに、フィールドを京都市に広げ、点在して居住するマイノリティ外国人児童（インドネシア人児童）や、介護病院の周辺に集住するフィリピン系児童の学習支援においても、公立学校、留学生組織、エスニックコミュニティ、支援関連団体と連携して、外国にルーツを持つ児童に対する支援の課題を明らかにしつつ、DAISY 多言語テキストを結節点とする学習支援ネットワークを構築する。

これと並行して、(5) ブラジルを訪問し、サンパウロ市の帰国児童支援ボランティア団体（カエル・プロジェクト）やその他の団体と協力して、DAISY 多言語テキストによる支援ネットワーク構築に向けたアクション・リサーチを継続する。

これにより、グローバル化によって生じた問題を、グローバルなネットワーク形成によ

って、乗り越えようとする、下図のような国境に跨る支援ネットワークの構築に向けた基盤的整備を行う。



4. 研究成果

デジタルテキストのユニバーサルデザインであるDAISYに注目し、こうしたデジタル図書ツールが多文化共生社会構築、とりわけ、外国にルーツを持つ児童の学習支援に向けて、どのような可能性を拓くものであるかについて研究を進めてきた。

(1) 湖南省教育委員会と連携し、初期日本語指導教室「さくら教室」スタッフと協同して、当教室の3カ月間の日本語学習カリキュラムを多言語DAISY教材化する作業を行った。500語程度の基本用語を類型化して作ったフラッシュカード、動詞の使い方を中心にまとめた基本構文、小学校1年～3年生用国語教科書から、外国人児童もなじみやすい8編の文章などを、日本語とポルトガル語・スペイン語・中国語・英語・タガログ語による多言語DAISY教材化した。

(2) 湖南省教育委員会の支援を受け、ある公立小学校の日本語教室をフィールドとして、iPad3台を配置した。DAISY版教科書ならびに多言語DAISY教材が、外国人児童の指導に、いかなる効果を発揮するかについて教員インタビューを継続した。これにより、こうしたデジタル教材が、学習進度の偏差が大きいクラス運営に有効なこと、非漢字圏から来た外国人児童にとって、漢字の読みのトレーニングに有効なこと、紙ベースの教材以上に集中力を発揮して学習することなどが明らかとなった。

(3) 京都市のある公立小学校において、日本語が不自由なインドネシア児童の学習支援において、DAISY版教材を利用した支援システムの構築を目指した。国語・数学等において、必要箇所(要約を含む)をインドネシアのカジャマダ大学関係者と連携して、インド

ネシア語に翻訳してもらい、DAISY化は大学生・院生ボランティアが担うという国際的な支援ネットワーク構築を試みた。こうした国際連携活動の経験を基盤として、DAISYコンソーシアムの国際会議において、口頭発表を通じて、多言語DAISYテキストを基盤とする外国人児童支援のネットワーク形成の重要性について、この種の会議で、世界で初めて問題提起することができた。

(4) インドネシア人児童の学習支援の持続化を目指し、インドネシア留学生協会の協力を得て京阪神に在住する100名のインドネシア人に対する意識調査を実施し、当事者による支援システムの継続に向けた可能性を模索した。また、研究協力者によりインドネシアの現地調査も実施し、インドネシアの情報インフラ環境や教育におけるデジタル教材の利用の可能性についても把握に努めた。

(5) さらに、湖南省・京都市の2つの公立小学校において、図書室にタッチパネル型パソコンを据え付け、外国人児童、障害児童、日本人児童がともにDAISY教材に触れられる多文化共生教育空間を学校図書室に創造する試みを行った。京都市の学校では、外国人児童の支援を図書室で実施することにより、多言語DAISY教材を通じて、日本人児童と外国人児童がともに学び合う環境を一時的ではあったが生み出せることを確認した。

(6) 湖南省の小学校高学年生を対象として、日本の童話を生徒自身の創作挿絵と声とでDAISY絵本を作成するワークショップを行い、DAISYの教育への新たな応用も工夫した。

小学生にとって、魅力的なDAISY版図書を制作するという目的から、詩人・童話作家である野呂昶氏の作品を日本語とポルトガル語およびスペイン語翻訳を併記した多言語DAISY図書化を行い、当校において開催された滋賀県教育研修会(2012年11月)にてパネル展示し、広く滋賀県内に情報発信した。

これと並行して、京都市および京都市教育委員会の後援を得て、京都市内の小学生を対象として、DAISY絵本作成ワークショップを計3回(2012年8月23日、2013年3月26日、2013年12月26日)実施した。

第2回の絵本作成ワークショップに際しては、Jim Cumminsが提唱している“Identity Text”という概念に基づき、インドネシア人児童が主人公の「京都が大好きになったデウィ」を自主制作し、日本語・インドネシア語両言語による多言語DAISY絵本化した。この作品は、2013年8月に京都市国際交流会館で実施された「世界絵本展」に出展し、パネル展示

を行うなど、一般市民に向けた広報活動を行った。

(7) 2013年8月には2週間にわたり、ブラジル・サンパウロを訪問。ブラジルに帰国せざるを得なかった日系児童の支援体制について、フィールド調査を実施した。また、カエル・プロジェクト、ドリーナ・ファンデーション、日本語センター、日系小学校、日系新聞など重要な関連機関を訪問し、連携関係の構築のうで大きな前進を果せた。

とくに、日本語センターとは、古いバージョンの日本語テキストのDAISY図書化について了解を得、目下、その制作に当たっているところである。

(8) 現在まで制作してきたDAISY図書を国内外に公開し共有化する目的で、ウェブサイト(rits-daisy.com)を立ち上げた。同時に、茨城大学KISSELプロジェクトとも連携し、同サイトにも、DAISY教材をアップできるようにKISSEL側の仕様変更も行ってもらった。

(9) JICA 青年海外協力隊として、タイで活動しているグループより、社会的弱者支援に必要な専門用語(約2500語)の日本語・タイ語・英語3カ国語のDAISY辞書の制作依頼を受け、電子出版化の作業(翻訳監修も含む)を行った。

(10) 2013年3月24日には、DAISY公開シンポジウムを実施し、今までの成果を報告するとともに、DAISYの可能性について、前DAISYコンソーシアム会長河村宏氏、奈良県の特別支援教室担当者芳倉優富子氏とパネル討論を実施した。さらに、2014年2月3日には、滋賀県の公立学校で、校内研修会に際して、日本語教室担当者が事例報告を行うとともに、申請者がこの間の取り組みを紹介し、前DAISYコンソーシアム会長河村宏氏、リリアン・テルミ・ハタノ近畿大学准教授、内田晴子京都女子大学非常勤講師など専門家を交えて検討会を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 4件)

Wataru Ozawa, "Action Research to build a Transnational Volunteer Support Network for Foreign Students' Education: Possibility of Digital Book System as a Tool for Volunteer Linkage" International society for third sector

research (ISTR) The 8th Asia-Pacific Regional Conference, in Seoul, 2013年10月25日

小澤 亘・世森歩「デジタルツールによる外国人児童学習支援ネットワーク形成に向けて 京都市におけるインドネシア人児童学習支援の実践を事例に」国際ボランティア学会、2013年2月16日、名古屋
Wataru Ozawa, "Action Research on the Minority Problem in Japan: How we can empower the Voluntary Support Network for Foreign Students' Education by DAISY System?" International Society for Third Sector Research (ISTR), in Siena, 2012年7月12日

Wataru Ozawa, "Support network for foreign students' education by DAISY" International Daisy Congress 'Digital Books, Inclusion and the Market: New production perspectives', in Sao Paulo, 2011年11月5日

[その他]

ホームページの立ち上げ:

DAISY教材共有化サイト

<http://rits-daisy.com>

6. 研究組織

研究代表者

小澤 亘 (OZAWA, Wataru)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号: 3 0 2 6 8 1 4 8